

5月の連休後半、奥穂高を目指して上高地に入った。目的は二つあった。山頂に登ること。満天の星を見ることだった。どちらも果たせなかった。悪天候が北アルプスを覆った。それでも、上高地から徳澤を過ぎ、横尾山荘で1泊するまではよかった。翌日はアイゼンを履き涸沢まで行った。予定ではそこから穂高小屋に向かいさらに1泊して、奥穂に向かうことになっていた。が、涸沢で雨が雪に変わった。視界は悪くなり、奥穂山頂は断念した。空いた時間で、井上靖の『氷壁』を読んだ。北アルプスの前穂高と徳澤、上高地の美しさが、東京との対比でつづられていく。そのなかに、ロジェ・デュプレの詩が出てきた。目が留まった。



やまもと とうた
山本 朗太

山行(2)もしか或る日

へいつかある日 山で死んだら
／ふるい山の友よ 伝えてくれ
母親には 安らかだったと／男らしく死んだと 父親には伝えてく

れ／いとしい妻に俺が帰らなくて
も 生きて行けと／息子たちに
俺の踏みあとがふるさとの岩山に
残っていると／友よ 山に 小
さなケルンを積んで墓にしてくれ
ピッケル立てて俺のケルン
美しいフェースに朝の陽が輝く
広いテラス／友に贈る 俺のハン
マー／ピトンの歌声を 聞かせて
くれ) ピトンはフランス語で、
ドイツ語でいうハーケンのこと。

岩壁や氷瀑(ひょうばく)の登攀
(とうはん)に用いられる金属製の
のくさび。岩の割れ目や氷に打ち
込み、カラビナやザイルを通し登

攀の手掛かりとする。

美しい山の側面にケルンを積み、
亡き友のピッケルを立てる。それが
残ったものの務めだという詩だ。デ
ュプラはこの詩を作ってまもなく
ヒマラヤで消息を絶った。その詩を
深田久弥が翻訳し、大学山岳部に属
していた西前四郎が曲をつけた。タ
イトルは、もしか或(ある)日」と
いう。土橋茂子『山の歌集』(山と
渓谷社)に全文が載っている。『氷
壁』では主人公は、瀧谷で落石に
遭い、大腿(だいたい)部からの
出血多量で亡くなる。最期を記し
た手記には「ガス全クナク、月光
コウコウ。二時十五分ナリ。苦痛
全クナク、寒気ヲ感ゼズ。静カナ
リ。限りナク静カナリ」とあった。
(長崎大熱帯医学研究所教授)